

令和 7 年度 宇和中学校 第 1 学期学校評価 自己評価書

西予市立宇和中学校



1 学校評価の考察

(1) 前年度（同時期 1 学期）との比較から

今年度の 1 学期末の結果と、前年度同時期の結果を比較した。

今回の回答数は、教職員は県費負担教職員数「31 名」、生徒は 412 名中「370 名」、保護者は 375 世帯中「306 名」であった。回答の集約状況は概ね良好であった。「令和 7 年度第 1 学期学校評価アンケート」の教職員、生徒、保護者のそれぞれの質問の合計が上記の数「31 名」「370 名」「306 名」に満たない項目は、回答における選択肢の中の「0：分からない」を選んだ者の数を除いているためである。

教職員のみ 17 の質問項目を設けた。また、保護者の質問から 12 の質問項目を削除した。結果については、項目によってそれぞれ微増、微減はあるが、例年通りの傾向であった。全体的には肯定的な意見が多かった。教職員の評価において、質問項目 17 の「業務改善」に関する質問においても良好な結果となっている。今後も引き続き、校務を整理し、教職員一人一人が働きやすい職場環境づくりに取り組んでいく必要があると考える。

(2) 項目別；考察「令和 7 年度分」

① 項目 1（校訓のような生徒の育成）

教員・生徒・保護者ともに高い評価を維持しており、令和 7 年度も概ね安定している。ただし生徒・保護者の平均点はわずかに低下した。理念の共有は進んでいるが、特に生徒自身の実感（自己評価）に若干の低下が見られることから、校訓を意識した具体的な活動の可視化・振り返りの機会が必要である。学年だよりや学校通信で「この活動が校訓のどの部分に結びついているか」を定期的に紹介したり、校内掲示板に「校訓を体現している生徒の姿」を紹介するコーナーを設置したりするなど、工夫した取組みを展開していきたい。

② 項目 2（学校に行くのが楽しみ）

教員・保護者の評価はやや上昇、生徒の自己評価はほぼ横ばいであった。学校生活の魅力は一定程度保たれているが、楽しみに感じる生徒の割合は 85%→84%と微減している。多様な活動機会の提供と、生徒の声を反映した行事等の企画が求められる。生徒アンケート等を通して「楽しいと感じる時間や活動」を把握し、行事や日常活動に反映していきたい。

③ 項目 3（自主的な学習）

全ての立場でやや低下している。学習への意欲に課題が見られる。I C T の活用や探究型学習の導入など、学びの在り方そのものを見直し、生徒の内発的動機付けを高める支援が急務である。具体的には、学習の目的や見通しを明確に示し、「なぜ学ぶか」を意識付けたり、タブレットや I C T を活用し、個別最適化された学びや調べ学習の機会を増やしたりしたい。

④ 項目 4（分かりやすい授業）

教員・保護者・生徒ともに若干の低下傾向であった。丁寧な授業づくりが続けられているが、質のばらつきや学習スタイルとの相性が影響している可能性がある。授業改善の校内研究や授業公開による共通理解の深化が重要である。教員間の授業公開・研究協議を強化し、共通実践（板書、発問、まとめ等）の質を向上させたり、生徒への「授業ふりかえりカード」などを用いて、リアルタイムで授業改善に活かしたりしていきたい。また、保護者にも授業風景を紹介する機会（授業参観動画・通信での紹介）を増やしていきたいと考える。

⑤ 項目 5（充実した部活動）

全体としてやや低下であった。活動時間・内容の制限や、生徒数減少に伴う部活動の運営難が影響している可能性がある。部活動の質と機会均等の両立を目指し、外部人材や地域との連携も視野に入れた見直しが必要である。生徒への定期的な満足度調査を実施し、活動時間・内容の改善に活かしたり、顧問外の「外部指導者」や地域との連携を進め、多様な活動機会を提供したりすることを検討していきたい。また、部活動の成果や工夫を学校通信やホームページ等で積極的に発信し、保護者の理解と信頼を得る必要があると考える。

⑥ 項目 6（話を聞いてくれる）

教員・生徒は向上したが、保護者はやや低下した。教員の姿勢や関係性は向上している一方、保護者からの評価がやや落ちている点は、学校と家庭の連携不足が示唆される。保護者との対話や相談体制の充実が求められる。生徒との個別面談・振り返り活動の機会を定期的に設け、安心感を高めるとともに、保護者への連絡や相談対応で、「生徒の声をもとに対応していること」を明示していく必要がある。

⑦ 項目 7（命の大切さ）

教員・生徒は向上したが、保護者は低下した。指導は丁寧に実施されているが、家庭にその成果が届いていない。命に関する教育（道徳や講話等）の内容や取組を、保護者にも丁寧に共有することが信頼感向上につながる。生徒の振り返りを保護者と共有し、「何を学び、どう感じたか」を家庭で話題にできる工夫をしていきたい。

⑧ 項目 8（いじめ・トラブルへの対応）

教員・生徒はほぼ維持しているが、保護者はやや低下した。対応の実態と保護者の認識にギャップがある可能性がある。日常的な取組の「見える化」や事後対応の丁寧な説明など、信頼関係構築がカギである。学校が日頃から行っている取組（アンケート、相談体制、指導事例など）を定期的に発信するなど、取組を工夫していきたい。

⑨ 項目 9 (分かりやすい情報発信)

教員・生徒・保護者いずれもやや評価が低下した。特に保護者の平均値が 3.23 から 3.06 と、定価の様子が顕著であった。伝達手段は整っていても、「伝わっている実感」に課題がある。学校通信を「写真・図解」等を中心にして、視認性を向上させたい。また、「家庭への発信回数・タイミング・内容の質」の点検を定期的に行うとともに、保護者アンケートで「もっと知りたい情報」を収集するなど、改善に努めたい。

⑩ 項目 10 (いけないことをきちんと指導している)

教員・生徒は高評価を維持または向上したが、保護者の評価はやや低下した。指導は行われているが、保護者への共有が不足していると考えられる。指導場面の考え方・経緯を保護者と共有する機会を設けていきたい(例：学年だよりで紹介)。また、道徳や生活指導の授業で、生徒自身に振り返りをさせ、家庭で話題にできるよう促していきたい。

⑪ 項目 11 (挨拶)

生徒・教員・保護者すべての視点で低下傾向であった。日常化によって「当たり前」になり、印象が薄れた可能性も考えられる。「あいさつ運動」や「あいさつ名人表彰」など、改めて意識化する機会を設けていきたい。また、学校・地域連携で「あいさつマップ」や活動の振り返りポスターを掲示したり、教員もあいさつのロールモデルを意識的に示したりし、あいさつの向上に努めていきたい。

⑫ 項目 12 (清掃態度)

やや低下傾向だが、生徒の自己評価は高く維持されている。今後も、清掃中の様子を写真や動画で紹介するなどし、努力の「見える化」を図っていきたい。清掃時間における工夫や分担の見直しも必要である。清掃を通じた学級・学年の取組(清掃週間、担当場所の交流など)を充実させていきたいと考える。

⑬ 項目 13 (人権教育)

教員・生徒は高めに推移するも、保護者評価は更に低下(2.77→2.64)している。「家庭で話す機会があるか」を問う設問であり、家庭内の広がりには課題があると考えられる。学校での人権学習の内容を家庭にも共有し、家庭での対話を促していきたい。また、「人権を考える一言」「今日の人権テーマ」など、家庭向けワークを配布したり、保護者対象の人権研修や講演会の実施・報告記事の発信をしたりし、人権意識の向上に努めていきたい。

⑭ 項目 14 (ふるさと学習)

やや低下傾向だが、生徒自身の評価は高く、教員・保護者が低めであった。実感の共有が不足していると考えられる。学習成果を展示・発表する機会(地域報告会・校内展示)を設け、保護者にも見える形で紹介していきたい。今後も、地域の方を講師として迎えるなど、学びの深さを体感できる活動にしていきたい。

⑮⑯ 項目 15（生活の心得）、16（服装規定）

肯定的な回答の割合が、生徒、保護者、教職員で約 90%以上となっており、良好な結果であった。必要に応じて、服装規定について、生徒や保護者の意見を取り入れながら、生徒が主体的にきまりの内容について検討する機会を設け、見直しを行った。現在の生活の心得や服装規定を基盤に、生徒指導体制を充実させるとともに、時代に即した適切な内容になるよう適宜見直し等を行っていきたいと考える。

⑰ 項目 17（業務改善）

取組は行っているものの、成果実感が伴っていない可能性が考えられる。教員間での共有や達成感が薄いかもしれない。年度を通じて行った改善事例を一覧化し、成果を「見える化」して共有するなど、取組を工夫していききたい。

2 具体的な今後の取組

(1) 学校全体での取組（改善点の明確化、意識改革の必要性）

令和 6 年度および令和 7 年度の学校評価（項目 1～17）を比較した結果、生徒の取組意欲や教職員の教育実践の質は概ね維持されており、学校全体として安定した教育活動が行われていることが確認された。一方で、以下のような傾向と課題も明らかになった。

ア 生徒の自己評価は概ね高水準を維持

多くの項目で、生徒は学校生活や学びへの満足度を一定程度高く評価しており、特に「命を大切にすること」「わかりやすい授業」「ふるさと学習」「清掃への取組」などの面で肯定的な傾向が見られた。これは、日頃の丁寧な教育活動の積み重ねや、生徒指導・授業改善等の努力が着実に実を結んでいることの証と考えられる。

イ 保護者評価にやや低下傾向

一部の項目では保護者評価に低下が見られ、特に以下の分野で顕著であった。

- ・ 学校方針や取組の「家庭への伝達」（項目 9）
- ・ 学習意欲や部活動に対する実感（項目 3・5）
- ・ 人権に関する家庭での対話（項目 13）

これらは、学校内での教育実践が必ずしも家庭にまで届いていない、あるいはその価値が十分に伝わっていないことの表れである。今後は、「見える化」や「対話の機会の工夫」により、家庭との信頼関係をより強固なものとする必要がある。

ウ 教職員の意識と努力の継続

教職員の評価では、道徳指導・人権感覚・生徒理解などにおいて高い自覚が示された。一方で、「業務改善」や「あいさつの定着」などではやや停滞感も見受けられ、持続可能な勤務環境の整備と職員間の協働体制の強化が求められる。

エ 全体としての改善課題と方向性

(ア) 発信力の強化（特に保護者・地域への情報共有）

学校通信・ホームページ・SNS 等を活用し、「伝わる広報」を意識した情報発信を行う。

(イ) 主体的な学びと学校生活の質の向上

探究的な学習や、生徒主体の活動づくりを強化し、学びへの内発的動機付けを促進する。

(ウ) 学校文化の再確認（あいさつ、生活の心得など）
日常の規範やルールを、再度全体で共有し、意識づけと継続した取組を推進する。

(エ) 教職員の働きやすさと連携体制の強化
教職員の負担軽減に向けた業務見直しを進めるとともに、成果の共有や励まし合いの文化を醸成する。

(2) 学年部を中心とした「学校評価の考察と今後の取組」

< 3 年部考察 >

項目 2 「学校に行くのが楽しみ」…学校へ行くのを楽しみにしている生徒が多くなっていることより、水曜校時などの日課表の工夫、サポートルームなどの対応が実を結んでいると考える。

項目 13 「人権教育」…学校教育の中では人権教育の推進はできているが、家庭に持ち帰ってまで共有するには至っていないのが現状である。

→ 2 学期に向けた戦略

① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。

- 生徒たちが主体的に活動したくなるような、教員の声掛け、授業の工夫をこれからもしていく。
- その時だけにならないような人権教育や人権に関する情報の発信をしていく必要がある。

② 学年部を中心として取り組んでいくこと。

- 3 年生が思う存分、行事等で活動できるよう 3 年部で見守る。また、進路については不安を抱いている生徒には声を掛けをし、教員同士で情報を共有しながら、細やかな指導を心がける。
- 日頃から道徳の授業や学級活動において、人権感覚を養う教育を行い、正しい知識や情報を伝えていく必要がある。

< 2 年部考察 >

項目 3 「自主的な学習」…学習の必要性を感じていなかったり、やらされている意識が高かったりして、学習に向き合うことがなかなかできないのではないのか。

項目 13 「人権教育」…保護者が子供と話をしていないというのは、人権教育のとらえ方にもよると思う。難しく考えず、挨拶や言葉遣い、友達とのかかわり方等の話も人権教育につながる。

→ 2 学期に向けた戦略

① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。

- 学習にどのように取り組ませるのか、どのような配慮を行うのかなどは、各学年部で情報交換をしながら連携して行っていきたい。
- 教師は、定期的に人権教育を意識して学ぶことが大切だと思う。夏休みの研修はとてもよかった。1 度では忘れてしまうので繰り返し、教員も学びなおしが必要だと思う。人権参観日をメインに考えるのではなく、日頃から人権に関する知識・情報を得ることで、人権感覚を磨いていく。

② 学年部を中心として取り組んでいくこと。

- 2 学期を迎える前に、宿題が終わった状態になるように、学年部で配慮生徒に声掛けを行い、学習の場を設定している。「やってよかった」「わかった、

できた」という気持ちを少しでも感じさせ、いろいろなことから逃げない生徒にしていきたい。ただし、特別に配慮のいる生徒については、生活面を整えさせたり、進路について考えさせたりすることも並行して行うことが必要ではないかと思う。

- 学年集会等では、問題が起こった時に開いて指導することが多いが、月1回は集会をして、人間関係作りの活動を取り入れるなど人権意識を高める活動ができればよいと思う。

<1年部考察>

項目3「自主的な学習」…生徒自身は何をしていいのかわからない状況なのではないか。適宜、教師側が教えることも必要なのではないだろうか。

項目11「あいさつ」…学校全体としてあいさつに力を入れていこうとする姿勢が生徒には身についていると思う。ただ、それが周りの人から見たときに、あいさつができていると言うことが難しい状況なのだと考える。

→2学期に向けた戦略；

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
 - 夢や目標を持つ生徒が減ってきているように思う。その結果、何のために学んでいるのか、やる気が出ない無気力な雰囲気も感じるため、つながりのある進路学習を1年生から行う。
 - 朝のあいさつ活動などの時間や参加について、工夫ある活動を行う。
- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
 - 学習委員会を中心に、学習の内容をもとに一問一答などを作成し、学年掲示などに貼る。解答をめくれるようにし、QRコードで読み取ると解説が見れるなど、工夫した学習コーナーをつくる。
 - 各クラスで授業前後のあいさつや出会った人へのあいさつの態度など、実際の生徒の行動をみて、定期的に指導やフィードバックを行う。